

宋代皇帝御書の機能と社会

—孝宗「太白名山碑」(東福寺蔵)をめぐって

《キーワード》三館秘閣六閣・天童山・阿育王山

塚本 磨 充

一. はじめに—「太白名山碑」概要

「宋孝宗御書太白名山四大字」(東福寺蔵、図1、以下「太白名山碑」)は、聖一国師円爾弁円(一一〇二〜一二八〇)が入宋のおり嘉禎元年(一一三五、南宋端平二年)四月〜仁治二年(一二四一、南宋淳祐元年)六月請来したとされる碑拓である。この碑拓については、東福寺普門院の蔵書目録に、多くの宋版書籍と並んで「径山書



図1 「宋孝宗御書太白名山四大字」(東福寺)

額等、歴代法帖」が著録されていることから、文和二年(一一三三)までには他の宋拓碑本同様に東福寺にあったことがわかる¹⁾。「太白名山碑」は、全体を筆でこするようにしてとられた氈蠟の拓本で、日本に伝わる宋拓本の技術的基準作として知られ、また、雄渾な筆法でかかれた「太白名山」の四字は、南宋の大字書法のありかたを伝える重要資料として、これまでも書法史上は重要視されてきた。

縦一八七・九cm、横八四・二cmにもなるこの巨大な碑の拓本は、碑額に「御書」の二文字と雲龍瑞華紋、中央四文字のなかに「御書之寶」印、その上に「賜天童山」の文字が記される。「太白山」とは、本碑が下賜された浙江省天童山のことである。この御書碑下賜の由来については、下に付された了朴自身の文や樓鑰「天童山千佛閣記」などによって知ることができる²⁾。これによると、魏王愷(一一四六〜一一八〇)は天童山景德寺僧慈航了朴を氣に入り「暇日来游」して累日去るに忍びなかったため、父孝宗へ「太白山図」を以て進上し、少保右丞相永国公史浩(一一〇六〜一一九四)の奏

